

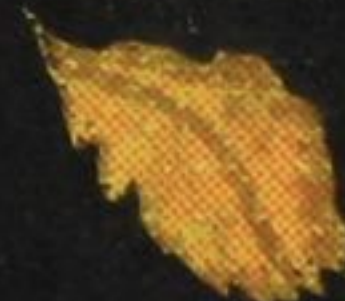
集詩のテンダ



ダンテの詩集

名蹟信美の譯

崇文館刊





集詩のーテンダ

譯夫信躍石

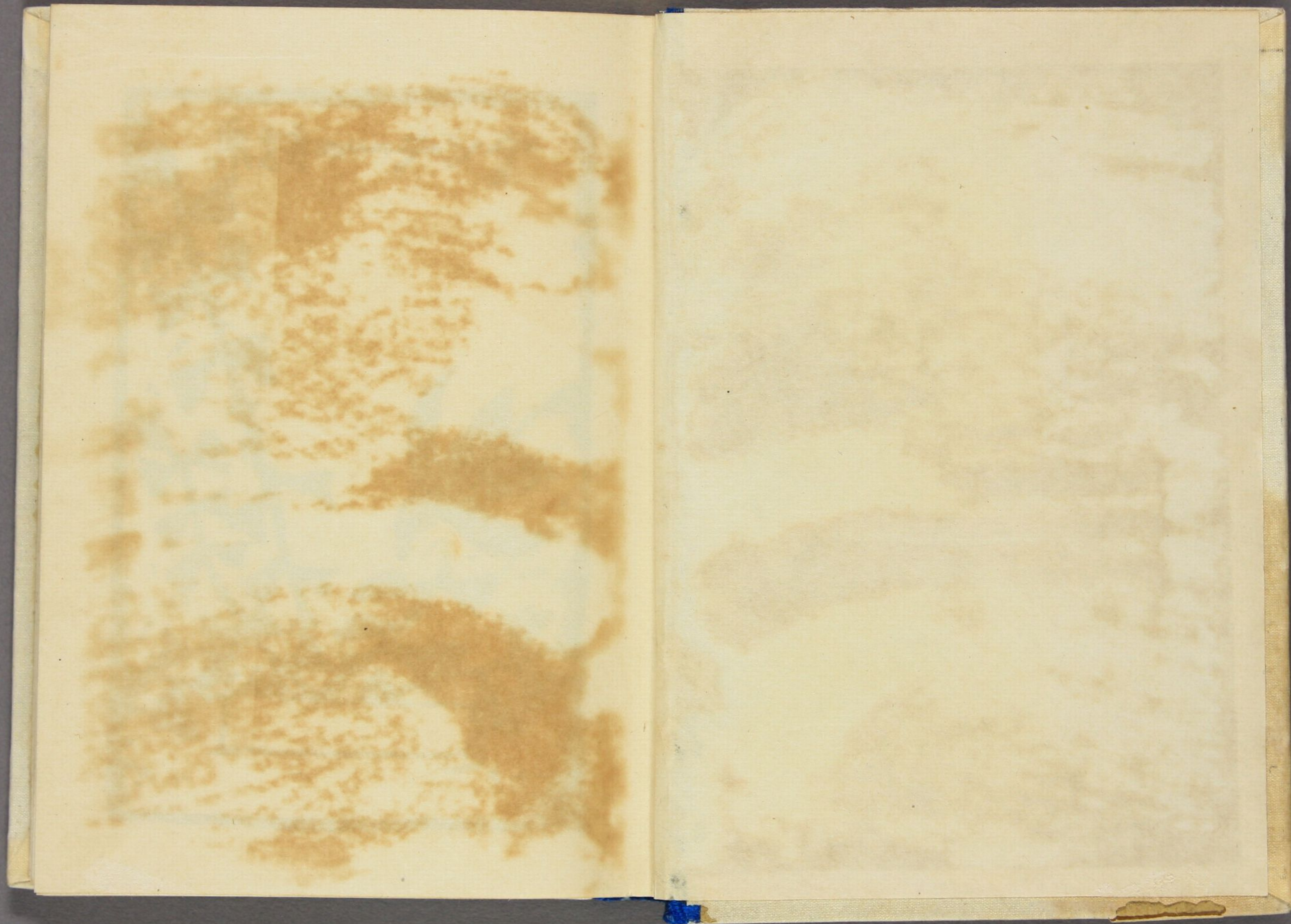


ダンテの詩集

石躍信夫譯



崇文館刊



集詩の一ページ



序

こゝに收めたダンテの詩は、主として情熱の詩人の代表的なものゝみを選んで、極めて平易に譯したいと言ふ希望から、口語譯を以てしたのである

然しこれは詩の味ひの上から言へば、殆んど言葉そのものを音樂のやうに取り扱つたダンテの詩にとつてその効果を幾分失ふかも知れないが、口語體の方が原詩の意味をはつきり出すことが出来ると思つたので

多少無理なところもあつたが、全部口語を用ひて原詩の趣きを出すことにつとめた。

殊に新生命のうちの詩を始め、巻頭の詩數篇も、題がないので、各詩の最初の句から題をつけることにしたのである。

然もダンテ・アリギエリの詩は、何れも極めて優雅で情熱が溢れてゐるが爲めに、恰も夕闇の中に放たれた小鳥の啼くやうに哀愁に充ちてゐる。願くばこの詩

の拙い譯がダンテ愛好者に、幾分でも満足と與へ得れば幸である。

大正十二年四月

譯者

目次

抒情小曲

心あらば.....	三
優しい姿.....	八
私は御身等の.....	三
懐しい歌.....	七
ギドーよ.....	二
愛とともに.....	五

新生命(1)

優しい魂……………三

歩みをとめて……………三六

愛が涙を落すとき……………四

悲しい死……………四九

物憂い思ひ……………五

新生命(2)

私の歌……………六一

新生命(3)

あらゆる思ひ……………三

氣高い女よ……………七六

美しい歡び……………八二

愛の與へる……………八七

愛を知る女達よ……………九一

柔和な心と愛……………一一

私の戀人……………二五

愁ひに沈む人々よ……………二二〇
 若しもあなたが……………二二四
 憐れみ深く……………二二九
 私の心の中……………二四六
 私の愛しい人……………二五〇
 戀　　人……………二五四
 愛が私を……………二五八

新 生 命 (4)

惱ましい瞳……………二六五
 同情ある優しい心……………二七九
 私の胸に……………二八三
 私　　の　　眼……………二八八
 愛の顔色……………二九二
 私の兩眼よ……………二九五
 優しい思ひ……………一九九
 胸の思ひから……………二〇三

順禮たちよ……………	二〇六
嘆　　き……………	二一〇
地獄の關の刻銘……………	二一五
歌　　よ……………	二二七
私は美しい……………	二三三
心に餘る思ひ……………	二三九
愛しき人よ……………	二四三

目　次（終）

ダンテの詩集

石躍信夫譯

抒情小曲

心あらば

心あらば

心おきなく告げ給へ

何處から來給へば

かくも物を思ふのか

私に知らせて呉れたらば

私の思ふ君が身を
かく愁ひもて
歸らしめはしないのに。

おゝ貴い君よ
暫らくはこの道傍に
止るここを卑しいこ
言ひ給ふな

さても懐しい君が身の上を
聞かうこして思ひ煩ふ
人に語るここを
控へて居給ふな。

それを聞くのは
また私の苦しみだ
このやうに愛に引かされる

私の心なればこそ
愛のさせることは
ごんなことでもが
私の生をば
断ち切るだらう。

哀れご思ひ給へ
かくも私は衰へ果て

若しも御身たちの
慰めがなかつたら
私の身や魂は
放れ放れに
散つてゆく。

優しい姿

優しい姿を

なし給ふ貴女たちよ

物を思ふは誰だらう？

お、若しもそなたは

私の心に慕つてる

その女^{ひと}ではなからうか？
お、若しその女^{ひと}であつたなら
何うして隠して居られよう。

あの女^{ひと}の面影は

いこも變り果て

そのみ姿はかくも

衰へて見へる

私の眼に映る

あの女は早や人々を

幸福にした姿ではない。

若し私たちは

姫を知ることは出来ずとも

あの女のかくもまた

やつれて居らるゝを見ては

さもあるべきこととして

私たちにさへ何となく

いとも哀れに思はれる。

しかし若しもよく

見給ふたら、やがて

彼女の貴い眼の中に

あの姫君を

見出されよう

されば歎き給ふなよ

ごんなに憂ひに沈むとも。

私は御身等の

私は御身等の

優しい一群を

近く過ぎ去つた

多くの聖者たちの日に見た

そしてその初めの人の來たまきに

愛は傍近く彼女を導いた。

あの女のその眼元から
一つの光は現はれた
燃ゆる焰の靈のやうに
そして私は熱い心もて
一人の天使の面影のやうに
彼女の顔を仰ぎ見た。

あの優しい謙遜な

あなたの瞳から
洩れる美しい會釋もて
恵まれた人の心は
數ある徳をみたされる。

私は思ふ

天國に尊い君は生れて
私たちに幸福を與へるために

この世に下り給ふたのだ
さればあの君の
近くにいるものは幸福だ。

懐しい歌

おゝ懐しい歌よ
女の誇りとして
貴い君の身を
歌ふて行つたものよ
お前たちのもこへ

今まで来たところがないなら
吃度その一つは言ふだらう
それも皆同胞はらからであるさ。

私はお前たちに求めよう
多くの女に戀する人の
言葉を聞いてはならないと
そは彼の言ふ言葉は

眞實を友として
導いてゆくものでないからだ。

そして若しもお前たちが
彼の言葉に勝てなかつたら
お前の愛しい人ひとのまゝころへ
躊躇せず行くがよい。

そして告げてくれ
私の愛しい人よ
私の眼の願ひは
何處にあるかと言つて
憧憬れ悩んでゐる人の
爲めに告げようと
私たちは來たのだよ。

ギドウよ

——ギドール・カヴルカントイに——

おゝギドウよ
美しい風に誘はれて
一つの船に乗つて海に浮び
貴女とラボと私と共に
風のまにまに私等の

思ふところに行つたなら。

然も運命のまゝに

嵐は荒れるこも

私等に禍ひするこはなからう

されば何時も同じ心に生き

何ごともなかれこの思ひはまさる。

そはヂヤウバンナニペアトリチエと

あの三十の君と

私等こもろともに

その善良な人の

さだめ
運命とともに。

猶ほ何時も愛をば呬いて

彼等の何れもが

自分の思ふやうに

私等こ一様に

心の安けさを乞ふてゐるであらう。

譯者註、ギドゥはダンテと同じ時代の戀愛詩人で、數

多い美しい詩を残してゐる。

愛ごこもに

愛とともに

私はゐたのだ

太陽の九度も

廻り來たときから

然も彼が如何に私をからかひ

拍車で追つたかを知らう
そしてその力もて
笑ひまた泣かせよ。

力と智慧こで

彼を防がうこする人は

恰度暴風の中で

鐘を鳴らしてから

その響きもて

雲を霧とを追ひ拂ひ得るこ

思つてゐる人のやうに

愚かに見ゆるのだ。

愛の試めされる

庭の圍ひの中に

這入りては

自分の思ふがまゝの
思ひも出るところなく
よい考へさへも徒らに
迷ひ惑ふばかり。

新しい拍車の
一つにさへも
胸は躍る

私たちを今捉へてる
歡喜は如何ばかりだらう
それらの失せゆくとき
新しいものは
また返り来る。

新生命より (1)

優しい魂

優しい魂よ

貴い心よ

こゝに囁く

言葉を聞き給へ

その現はれを

私に教ふる人に幸あれ
愛する私たちの
主の御名により。

天の星は何れも
光を増して輝き
時は三つこもに
早や過ぎゆかうこして

愛は逸早くも
姿を現出した
そしてその靈を思ふとき
私に恐怖を抱かせた。

歡喜の愛は
私の心を
その手で掴み
その腕かひなには

紅い衣を

着て眠り

あの女を抱いて

ゐるやうに見えた。

彼があのを

呼び起しながら

燃ゆる心を

戦く君にさづくれば

君は禮義たゞしく

それを受けて呑み込み

然も彼はかくて

泣きながら消え失せた。

歩みをこめて

歩みをこめて

眺めてよ

お前たち愛の道を

旅する人々よ

私の切ない煩ひに

勝つた悩みがあらうか

願くば私の悲しみに

耳をかしてくれ

さうした後

如何にいろんな悩みが

私の胸に宿れるかを

知りたまへ。

愛はさゝやかな

私のよい心のためでなく

寛くて氣高い性により

かくも妙^たへなる美しい

生命を私に送つて來た。

されば私は思ふ

呼吸をするごとに

あゝ何の爲めに

かく楽しくも

私の心は躍るのか。

愛の寶から

私に恵まれた

強い心も今は早や

既にすつかり消ね失せた

貧しくもやつれて

それを語るにも

心は安まらず

恐れおのゝく。

恰度耻辱から

その身を隠した

人のやうにしたい爲め

表面は嬉しい様子して

然も心の中は

思ひ悩んで涙ぐむ。

愛が涙を落すとき

愛が涙を落すとき

愛する人々よ

泣きたまへ

彼の泣いてる

事情を聞き給へ

泣き濡れた眼に

苦しい悩みを顔に見せる

少女たちが悲しみを

呼ぶ聲を愛は聞いたのだ。

何故に悲しい死は

貴い心にその荒い

企らみを行ふか？

この世の徳についで
いと讃むべき美しさを
氣高い人から
奪ひ去らうとは。

聞きたまへ

私は愛が嘆き

悲しむのを見た

彼が眞實な姿を現はし
君の靈むくろと骸を見て
泣きぬれてゐたのを。

然も彼は仰いで

天國を指さす

彼處こそは

美しい少女の姿して

彼女の居給ふた

貴い魂の永久に

落ちつくところであつたのだ。

悲しい死

悲しい死

そは憐れみの敵

そは昔に變らぬ苦しみを生む母

そは争はれぬ運命

お、お前たちこそは

私の心に苦しみを興へた。

然も私は憂へて歩み

おまへを責めるのに

舌を疲れさすだけだ。

若しお前に恵みを

與へようこはすれご

私はおまへの過失を

あの邪よこしまなことを

云ふより他にない

そはお前はすべて

人に知られないのではないが

たゞあの愛はぐに育はぐまれる人を

自分の身から追ひ拂ふ

お前をば私は憎にくみたい。

この世からお前は
貴い人を持ち去つた
然も尊い女性の
徳ともろともに
楽しい若いさかりを
お前は愛でかためた
美しさを傷け引き裂いた。

もう私はあの女の^{ひと}
名をば口に出しはせぬ
そは自分の徳で
吃度知られるだらうから
然も幸福がなくなつては
あの女^{ひと}こもに居ようこは思はない。

物憂い思ひ

物憂い思ひに沈み

馬引いて道をゆき

歩みつゝも心重い昨日

私は道なかほの途中で

愛でつくわに出會した

順禮のやうな

軽い衣を着た愛に。

その面影は貧しく

いとも哀れな様子して

頼る人すらないやうに

悩みやつれて

溜息をつきながら

人の目を避け頭をば
首垂れつゝも歩いて來た。

彼は私を認め

私の名を呼んだ

そして私に言ふ

『私は遠いところから

私が運命もて

お前の心を捉へたところから
新しい歡喜を

お前に與へようとして來た』と

私がこの言葉に

思ひを傾けたとき

彼は消ぬ失せた

然も私は何時彼が

何うしたかを知らなかつた。

新生命より (2)

私の歌

私の歌よ

願くば愛に代つて

私の戀ひ慕ふ君のもこへ

行つてくれ

そしてお前は

私の罪の許しを乞ひ
それからあの人を
わが主を共に語らせよ。

私の歌よ

お前は禮義たゞしく
つゝましくして行け
すれば連れて行く人はなくとも

何處に行つても
怖れるやうなことはない。

若しも安らかに
行かうと思へば
先づ愛を見出して
共に共に歩いて行け
それがなくては

お前によいことはないだらう。

そはお前のことを

聞くべき君は

吃度私の爲めに

怒り給ふであらう

そしてお前が

それと共にゐなかつたら

直にお前に

恥をを與へるであらう。

妙へなる調べに

愛と共にゐて

物語つてから

あの人の憐れみを乞ひ

且つ告げ求めよ

『私の愛しい女よ』

私を此處に送つたあの人が

若しも心に叶つたら

私に告げたその思ひをば

こゝに打明けよう

そは愛であつたのだ

君の美しい面影に

思ひ染めてから

身も世もあらず

思ひ悩んで他の人を

見ても心は動かすに

たゞ君ばかりを戀ふてゐた。』

『愛しい女よ』

その心は堅く

眞實に充ちて居れば

心を籠めてたゞ君に
仕へるここのみ願つてゐた
そは幼ない時からたゞ君に
思ひのすべてを捧けてゐるがゆゑ、
それでもお前を
信じないならば
主なる愛に告げて

その眞實を問ふて見よ
言ふこゝが濟んだなら
慎んで乞ひ願ひ
若しも君に負ふ罪があつたなら
許しを更に乞ふて見よ
たとひ君が私に
死を掟て給ふこも
君の下僕はたちまちに

従つて行くであらう。

そしてすべての情の主に

それを告げて見よ

愛の主にかこ

お前が彼處から去るまへに

それから私の思ひをば

よく知らせておくれ。

『私の美しい調べに

恵みを與へ給ふて

あなたはこゝにあの女ひとこ

共に共に在し給へ

そしてあなたの下僕のために話し

然もあなたの願ひを聞いて

彼を許し給ふたら

その美しい御様子で

彼に平和を告げ給へ。』

お、優しい歌よ

お前の誇りこならうから
さらば直に行つてくれ。

あらゆる思ひ

あらゆる思ひは

私に愛を叫く

然もそのなかに

哀れいぢらしさを見る

さればまた彼の

徳にまかせようご願ひ

また彼の力の

厳しさをかこちて歎く。

あるときは絶わざる憧憬に

婉なる恵みを受け

あるときは幾度か

涙をさそはれるこころもあり

しかし憐れみを感じるとき

すべては一つとなり

心の底にある恐怖に

震へおのゝく

然も私はこの思ひから

何を言ひ何を話さうこ

思ひはすれごなかくくに

言ふすべさへも知り得ず

あゝ戀のために此様に

私は迷つてゐるゆゑに。

若しあらゆることをして

和解をしようとするならば

私の敵の彼をまた

招くより他はない

あの私の護りなる

あの哀れな女をば。

氣高い女よ

氣高い女よ

君は見知らぬ女たちご
私の姿を笑ひ給ふたが
それが何の故かを氣附かない
君の美しい面影の

光りに映わた

私の忌はしき姿を

装ふてゐたその理由^{わけ}も。

若し君がそれを知つたなら

憐れみは私の爲めに

常に變らぬしるしをするべきに

このやうに近く

君は私を見出して

愛はその強い心もて

若しくも私をしめつけた。

私の戦く魂を捉へ

暴虐な彼は

殺したり或は追ひ出した

かくて私はたゞ君を

仰いで見るより

他にすべはなかつた。

それから私は

見違ふばかりの姿に身をかへた

しかし心には追ひ出された

痛ましい魂の悲しみを

忘れることは出来なかつた。

美しい悦び

美しい悦びもて

君に逢ふとき

私の胸に覺ゆる

情愛は死にゆく

君が傍にあるときは

私は愛の叫きを聞く

『逃けて行け

死ぬことを願はねば。』

私の顔は赤い心の

色を現はしてゐるけれど

時には絶え入りながら

わづかに身を支へ

顔色も蒼ざめて

戦き震へつつ

石の叫ぶ聲をきく

『お前は死ぬがよい。』

その時私を見て

この惱んでゐる心を

慰めないものは罪なのだ

たゞ私の爲めに
歎きを見せたら
足るべき情をも

君は戯れごとをもて

悲しみを装ふた

私の蒼ざめた顔の

哀れな眼から叫ぶ情を

見たばかりで私の思ひは
死を願ふばかりだ。

愛の與へる

愛の與へる

物憂い思ひは幾度か

私の心に訪れて來た

然も憐れみは

私の方へ來たけれご

私は誰かに幸福はあるからと
愛に行けと言つたのだ。

愛は直に私をば
襲ふて捉へたが
生命は全く私をば
見捨て、一つの
生きた魂ばかりが

私を救ふべきに
君の身の上ばかりを打明けた。

自分自身を勵まして
自らを救はうと
此様に力なくやつれても
たゞ癒やされることを願ひ
君をもとめて歩み行かう。

遙に仰ぎ見る
眼を上げるとき
心は震へ戦き
私の魂は何時か
肉體より離れゆく。

愛を知る女達よ

愛を知る女達よ
私は貴女たちと
私の戀ひ慕ふ
あの女の身の上を語りませう、
そはあの女の賞讃を

たゞへるためではなく

たゞ私の胸の思ひの

溢れるにまかせるばかりです。

あの女ひとの氣高さを思ふと

愛は私の胸に

いと妙へなる心地を興へます。

然も私の堅い心に安んじて

かく語れば人々は

すべて愛にほだされると思ひます。

そして私の氣高さを

口にしないのは

そは卑しいこととして

恐れおびぬたのではないのです。

いわ、いわ、私はあの女の

優しい性質を言へば

その言葉に美しさを願つてゐたのです。

愛を知る女達よ

少女たちよ

あなた達よ

また思ふことなく

無邪氣に語りませう。

天の使は神々しい

さかしい聲で言はれます、

『主よ、この世の中で

不思議な技わざが見ゆるのは

天國に輝いてゐる

一つの魂の行ひです。

たゞこの女より他に

天に缺ぐることはないけれど

何時かは主の君は

あの女ひとを來らせ給ふでせう。

聖徒たちのすべては

み恵みによつて

あの女ひとを求めたのでした、

たゞ慈悲ばかりは

私たちの助けとなるでせう。

それから神は

これを聞き給ふて言はれるには

『私の歡ばしいものよ

今は安らかに忍べよ

お前たちの望みを

私の心に叶へるまで

彼處に居られよ

彼處にはあの女ひとを

失ふのを恐れるものが一人あつて

地獄で苦しんでゐる

人たちに告げるだらう、

私は幸福な望みを

見たものであること。』

天國ではあの女^{ひと}を

待ち望んでゐるのです、

いま私はあの女^{ひと}の徳を

あなた達に知らせませう、

私は氣高い女性のやうに

なるにはあの女^{ひと}と共に

行けと言ひたいのです。

されど道にそむく

卑しい心には

愛は霜を降らせては
あらゆる思ひを氷らせて
そして遂に枯らすでせう、
然もみ姿に近く
立つここの出来るものは
貴い徳を慕ひなさい、
さなくば身は忽ち亡びませう。

何處かにあの女に
比べる人があつたなら
先づ自分の徳を試しなさい、
誰かがあの女のひと恵みの
言葉を受ける爲に行くならば
心を謙遜にして
邪しまを忘れなさい。

神は大きな恵みをば

彼に與へ給ふでせう、

そはあの女ひとこ一度口をかはしたら

彼の亡ぶことは早やないであらうから。

愛は言ひます

『生命は亡ぶものであるが

何うして斯様に美しく

清淨でゐるここが出来るだらう？

私はあの女を見て思ふ、

そは神が新たなものを

造らうとしたまふのだらうこ。』

眞珠の色で形ぎつた

あの女ひとの姿こそ

女性の姿の美しさの極みです、

あの女は自然がもたらした
恵みで美しい試しこなつたのです。

あの女の眼を動かすこ
その眼から愛の精霊は
焰こなつて出て來ます、
あらゆる人の見る眼を奪つて
人々の心に喰ひ入る道を見出し

あなた達の愛が
あの女の微笑のなかに
漂ふてゐるのを御覽なさい、
どんな人でも強ひて眼を
据ゐて仰ぐことは難いでせう。

歌よ、私はお前が
形をなすこ一時に

多くの女と語つて

行くのを知つてゐます。

それで私は忠告したいのです。

お前は若く貴い愛の

娘のために送られたのであれば

彼處に行つてたゞ

願ふやうに話しなさい。

『私はあの女ひとのこころへやられ

あの女を讃へ歌ふのです』

けれごふこした心に誘はれて

悪い人の住む邊に行つてはなりません、

お前に示されたやうにつこめ

たゞ貴女たちや

正しい人と共に在しませ。

彼等はお前を早く導いて行くでせう、

然もお前は彼等の

その中に愛を見出すでせう、

それから私の爲めに

お前の言つたことを告げなさい。

新生命より (3)

柔和な心と愛

柔和な心と

愛は一つこなる

そは既に賢人の

口から言はれたのだ

然も一つを失へば

恰度思案する魂に
理性のないやうに
他の働きはない

そは愛するときは

自然のさだめにより

愛は私たちの友ともなり

心はその住家ともなる

愛はその中に
静に憩ひ眠るのだ
あるときは短くまた長く。

賢い女に美しさが

現はれるそのときに

眺める眼は大きな歡喜に充ち

胸にはその歡喜を

求むる願望が生れ出る

愛の魂の眼覺むる時まで

斯様な有様は保たれ

そして女性の胸にも

ひこしく男の徳は動いてゐる。

私の戀人

私の戀人の

その眼には愛が溢れてゐる

されば彼女を一眼見たら

人の心は爽かに柔らやわらぎ

彼女の歩くところに

人は何れも眼を注ぎ
然も彼女が口をきく
その恵みにあへば心戦く。

さて人は首垂れて
色も蒼ざめて
そのとき自らの
邪しまなのを歎き

あの人の心から
驕慢は取り去らる
貴女たちよ、私を助けて
あの人に誇りを與へよ。

いろんな優しい情けと
敬虔な思ひ出は
彼女の言葉を

聞く心に生れ出る

おゝ始めてあの人を

見るものはごんなに幸福だらう。

わづかに微笑を洩らすとき

あの人顔附は

たごへるに物もないほごに

思ふ心もつくされず

斯の様に新しい

優しけな奇蹟のやうだ。

愁ひに沈む人々よ

愁ひに沈む人々よ

うつむいた眼差に

悲しみをたゝへ

何處から來られたら

かくも色蒼ざめて

悲しい姿をば

なし給ふのだらう？

愛の涙に頬を濡らした

私たちの愛しい姫君を

見給ふのだらう？

御身等よ告げ給へ

私の切ないこの胸に

眞心をもてゆく御身等よ。

若しあの深い悲しみを

見て來給ふたら

暫し私とともに

居ておくれ、

あの人の身は

何うなりこなるゆゑに。

涙を浮べた御身等の

眼を私は知つてゐる

そしてかくも歎いて

來給ふたのを見るこきに

私の心は震へ戦く。

若しもあなたが

若しもあなたが

その人であつたなら

私たちの姫君の身を

妙へなる調べで歌ひ

また共に話し合ふたことであらう

けれごあなたの其聲は

その人に似てはるるけれご

姿は似もつかず

變り果てた面影よ。

何うしてあなたは

かくも惱しけに

人の心に悲しみを

誘ふやうに泣くのだらう？

あなたは悲しみを

つゝみ得ないで

悲しんでゐるあの人を

何んで見給ふここが出来よう？。

私たちを泣かせ

且つ悲しみを與へよ

このやうな愁ひをば

慰めるのは無駄なここ

私たちは涙ぐまる、

あの人を見たゆゑに。

あゝあの方は

愁ひのなかに包まれた

そのさまを見ようと

望んだひとたちは

あの人のまへに

横死を遂げたらう。

憐れみ深く

憐れみ深く

年若い少女は

人の情愛の優しさを

知つてはゐるけれど

私が幾度か死の方へ

呼んだ傍にゐても

私の眼に涙の

溢れるのを見ても

震へながら語るのを聞いて

彼女は恐れ戦き

たゞ痛ましい涙に誘はれた。

そして他の女たちは

私と共に泣いてゐて

私の身をば氣つかひて

彼女を遂に連れ去つた

然も私の心を

害そこなふまいと務めつゝ

『眠つてゐなさい』

『何んで此様に悲しみ給ふか？』

と言ひ、また訊ね

その時私の戀ひ慕ふ

君の御名を呼んだらば

不思議にも幻まぼろしは消え果てた。

私の聲はいそ苦しく

煩ひこ涙で傷けられ

私はひとりこの胸に

あの御名を聞いてゐるばかり

然も私の顔は恥らひに曇り

悩みと涙にくれてゐたものを

愛は何時かこの私をば

あの女たちの方へ向けたのだ。

私の顔は悩みに充ち

人々に死の恐怖を抱かせた

『あゝ、彼を慰めよう』

かく人々はつゝましく言ひ

そしてなつかしく問ひかけた

『何うしてそんなに弱つたの？』

そこで私は暫し心を落着けて

『あなたがたに私は話しませう。』

私はかよわい生命を

思ふたそのとき

その過ぎ去るこの

ごんなに果敢ないかを見たときに

愛を宿した心を泣かしめた

されば私の心は迷ひ悲しみ

溜息しながら心のうちに言つた

あゝ何時かは私の戀する

あなたも遂に長逝されるだらう。

私はこのとき不安と

恐怖におのゝいて

苦しく悶いた眼を閉ぢた

然も私の魂は離れ去り

迷ひ迷ふて飛び散つた

それから眼に見るものもなく

姿に眞實を思ひつゝ

多くの女たちは怒つて斯う言つた

『お前もまた死ぬであらう
吃度死ぬであらう。』

それからまたも幻となり

多くの不思議なここを見た

私は何處とも知れぬ

ところにあるここを知つたのだ

然も女たちは別々に歩いて来て

或は涙にむせび

或はまた泣き叫び

悲痛の矢をば

射られたやうだつた。

やがて太陽が

見る見る光を失へば

星は何時しか輝いて

何れも哀れをさそはせた

空飛ぶ鳥は地へ下りて

蒼は震へ戦いた

そして一人の人は

恐怖に断られて蒼ざめつゝ言つた

『おゝお前は知らないか

美しいお前の戀人の逝いたのを。』

涙に濡れた自分の眼を上げて

仄かに雨の降るやうに

見わた空の彼方に

私は天使たちが

天國へミ歸つて行くのを仰いだ

そして彼等は一つの

小さな雲をめぐりて

天使たちの聲を合せて

ホザナと呼んだのを

聞いたことがあるならば

私は更に語らう。

その時愛は言ふ

『早や隠れるここなく

行つて私たちの姫君の群を御覽』

偽りの幻は私を導き

あの人の魂と

その骸むくろの姿を見わさせた

そして君に侍する女たちは

彼女の顔を白い絹で掩ふのだ

そこに私は眞に敬虔な

姿を見て言つた。

『私は安らかに永眠した』

私は憐みのうちに敬虔を知り

あの君にかたちこなつた

この美しい徳を見た

そこで私は斯う言つた

『死よ、お前こそ愛しい

お前は私の戀人と共にゐて

今は優しいものこなつて呉れ

然も憐れみ深く

荒々しいこゝをせず

私はお前のものゝならうとし

またお前と一つにならうと願つてる。

そして來れば私はお前に

私の心を與へよう

斯う言つて私は離れ

あらゆる苦しみが

すべて私ひとりに残つたとき

あの遙かな天國を眺めながら言つた

『お、美しい魂よ

御身を見たものは

何ぞ幸福なこゝであらう。』

このとき私は

御身等の情に眼覺めた。

私の心の中

私の心の中に
眠つてゐた愛の願ひが
眼覚めるのを知つた
そして遠いところから
愛が嬉しげにやつて來るのを

私は少しも氣づかなかつた。

彼の言ふには
今こそお前は
私に誇つて見よ
然も語る言葉のその度に
彼の微笑は輝いた
そして私の主は私と共に

暫らくは一緒にゐて
こゝに彼があらはれた
其方を眺めてゐた。

私はヂョバナナの君こ
ベアトリチエの君こ
私のあるところに向つて
歩いて來るのを見た

不思議にもそれが
彼の前に立ち並んで。

然も心に思ひ出した時
愛は靜かに言つた
『これは春のむすめで
そしてそれは私とひこしく
愛こ名づけるものだ』

私の愛しい人

私の愛しい人は

人こ話すまきに

しとやかで優しく

温しい性質のやうだ

しかしその舌は震へ

眼を上げて見ることも出来ないで。

彼女は賞讃の言葉を聞きつゝ

謙遜な衣をまこひ

静かに歩をうつす

そして恰度この世に

天國から一つの不可思議を

現はさうこしたやうに見ゆる。

姿は眺めてゐるものをして

いとも喜ばしく見ゆ

眼からは何とも言へぬ心地をば

私の胸に吹きおくる

然も彼女をまだ見ぬ人は

何をも悟りやせぬ。

微笑むやうになつかしく

愛の籠つた魂は此方向きいて

私の魂に溜息せよと言ひつけた。

戀 人

戀人を御身等の

その中に見るものは

あらゆる幸福を

殆んど完全に見るのだ

彼女と共にあるものは

美しい恩寵を

神の御前に感謝せねばならぬ。

彼女の美しさの中には

いこ氣高い徳があるので

嫉妬する心は

ごんな人にも起ることはなく

然も人々は彼女と共に

貴さと愛と眞實を

衣に着て歩むのだ。

彼女の顔はあらゆるものをして

謙遜にするのだ

そは彼女ひこりの

慕はしい姿ばかりでなく

人は皆彼女のために

譽れをうけるのだ。

彼女の行爲は

優しい情けを持ち

心ではあの人を思ひ

人は何れも愛の甘さに

溜息を吐いてゐる。

愛が私を

愛が私をほだして

その國で私を馴れさせたのが

いとも久しいその故に

あるときの私の思ひの辛かつたより

今は心にいと楽しくなつたのだ。

強い心は私から離れ行き
身も魂も消ゆ入るやうな
思ひのするときに
私の弱い心は限りなくも
歡びに酔ひしれて
私の顔は變り果てた、
然も愛は私に
多くの徳を與へる爲めに

私の溜息は

物語りながら歩く

胸から出て私の

戀ひ慕ふ君を呼びながら

大きな幸福を

與へ給へし願ふのだ。

彼女から一目に見られる

圓滿な徳は生れ出る

たゞ試みのない人は
信ぜずにいるのみだ。

新生命より (4)

悩ましい瞳

悩ましい瞳は

胸の悲しみゆゑに

流れる涙に傷ついて

力は盡きてしまひ

あやなくなり果てた。

いま私を死の方へ
連れてゆく苦しみを
告げようと願ふなら
歎き悲しむ其聲を
たゞ歌こするばかり。
在世のそのとき私の戀人の
身の上を語つたのを思ひ出せば
愛しい御身等よ

そは共に無駄なことを言はず
その女性の胸に潜んだ
優しい心ばかりを物語らう
然も私は涙ながらに
彼女の身の上を物語らう
そんなに彼女が天に昇つて
私と共にその愛を
痛ましくも残したかを。

いまベアトリチエの君は
あの高い空の天使たちと
平和を楽しむ天國で
一緒にゐませご御身等よ
御身等を見捨てたのは
あの方ではなく
他の人がしたやうな
焔の熱ですらなく

たゞ彼女のいさ優しい
その爲めであつたのだ。
そはあの人の敬虔の輝きは
永遠の主さへも賞め給ふ
徳の光で天國に行つたなら
それに依て美しい願ひは
主の御言葉により
彼女を召し給ひ

大きな幸福を與へ給ふのだ

そは私たちの主は

この惱ましい世がかくも

貴い優しい心の

住家でないのを見給ふからなのだ。

彼女の美しい姿から離れて

恩寵に充ちた貴い魂は

その價值あるところに榮ゐてゐる。

然も理性がありながら

これを悲しまぬ心は石で

いやしくも優しい思ひの

訪れて來るのを知らぬのだ。

悪い心は斯様な氣高さや

あの人の身の上までも

思つて見ることは出來ない。

然し思ひのうちに幾度か

あの人の在世のさまご

いかに逝き給ふたかこ見る人には

涙を流す望みは來なくとも

溜息と死の悲しみの

愁ひこ悲しみは湧き出で

あらゆる慰めは奪はれる。

切ない溜息に

痛みは激しく

心は重くそのうちに

思ひはすべて其心の

忘れぬ姿を浮び出す

然も幾度か死を思ふては

いとも懐しく

憧憬れ訪れ來て

私の顔から血の氣を失はす。
思ひ出が確しかこ私を捉へるとき
物は皆苦しみを與へ
私は切ない身を起すのだ
そして遂に恥らひは
人々の前から私を去らしめた
私はたゞ涙を浮べ
悲しみながら呼んで見る

ベアトリチエの君よ
お、君は既に逝つてしまつた
かくも君が御名を呼べば
そのとき私の心は慰められるのだ。
苦しい涙と歎きの溜息とは
獨りゐるとき私の心を傷け
私を見る人の心に悩みを與へる。
私の戀人が新しい世に先立つてから

私の身は此様にやつれ果て
言ひ盡されぬ悲しみは
たゞ知る人の知るのみだ。
されば御身等よ
私は言ひたいことは思ふけご
ごんなに私がしてゐるかを
ごんなに辛く自らの
身をば苛み傷けるかを

知り給ふことは出来ないのだ。

多くの人々が私に向つて

『お前を見捨てる言ふときに

その唇の色を失ふのは

何と言ふ可哀さうなことであらう。

ごんなに私が惱んでゐるかは

私の戀ひ慕ふ君には分るだらう

それで彼女から私は恵みを待つてゐる。

あはれ悲しい私の歌よ

涙と共にお前の姉妹等の

歡びを齎したあの人々を

貴女たちや少女たちの方へも行け

然も悲しみから生れた娘として

お前は慰めをも受けず

行つて彼等と共にゐるがよい。

同情ある優しい心

おゝ同情ある優しい心よ

こゝへ來て私の

溜息を聞いてくれ

こゝに慰めのない人々は

歩いて逃げるすべもなく

たゞ悩み悶じて死んでゆく。

私の眼は既に幾度か

切なく痛み傷いた

あの人のこゝを歎いては

胸も張り裂くばかりなのを

怖れては私の戀ひ人の爲めに

泣くのをもやめたのだ。

御身等は私がか心から

聲を上げてその戀人を

呼んでゐるのを聞かれたらう

既に彼女がその徳に

相應しいあの世に旅立つたのち

然もこの世では

身の悲しみに堪へないで

幸福と救ひにも見捨てられた

苦しい魂と身をかへたのを。

私の胸に

私の胸に

あの愛しい君は

訪ねてやつて来た

彼女は自分の徳により

高い主の御許に

天國のマリヤの在す
そのところに住んでゐたけれど。

私の胸に

あの愛しい君は

訪ねてやつて来た

愛に惜しまれて

泣かれたその人は

自らの徳の智慧から
知つた私の行ひを
見るためにやつて來た。

胸の中に

あの人を覺ゆ

愛は破れた心に眼を覺し
溜息に向つて言った

『苦しい思ひをこる爲めに
出ては行つたのだ。』

歎くこき私の胸から

聲と共に溜息は出て行き
そして其時の悲しい眼は
苦い涙を誘はれた。

しかし私の思ひを

一番傷けた思ひは言ふ

『おゝ、貴い智慧よ

今日は御身の天に上つてから

一年目に當るその日なのだ』

私の眼

私の眼は

あなたの姿に現はれた

憐れみ深い情を見出した

悩みの爲めに幾度か

私のした煩悶を

あなたが見給ふたその時に。

そのとき私は

あなたが此の憂愁に

生くるさまをば

思ひ給ふのを知つた

然も私の心に襲はれた

私の卑しさを其眼の中に

現はすのを恥ぢ入つた。

そしてあなたの前を

避けて隠れて見た姿に

涙は苦しい胸に

とめぎなく込み上げて來た。

私は痛ましい魂に向つて言つた

『私をかくも嘆き歩いた
愛は吃度その人の中に
宿つてゐるに違ひない。』

愛の顔色

愛の顔色こ
憐れみの似姿こが
かくも著しく女の顔に
嘗て現れたのを見なかつた
然も私の苦しい唇を見ながらも。

君の優しく愛しい眼を
惱ましい涙をば
私の前に見るまでは
君の爲めに思ふことが
私の胸に湧いて來るとき
私は胸の張り裂けるのを
怖れてばかりゐた。

私は惱ましい瞳を
君からうつすこともせず
泣きたい願ひがいつぱいで
幾度か君の方へ眼をやつた。
然も君が彼等の
願ひを増したなら
戀しさはつゝのるばかりで

たゞ君の前に涙を流す他はない。

私の兩眼よ

私の兩眼よ

お前たちの流した

若い涙がつかない其故に

他の人々も

お前たちの見るやうに

何時までも悲しく見てはゐる。

お前たちは何故に

こんな同情を受けてるのを忘れたのか

あんなに久しく惜しみ

悲しんだあの人を

いま私はお前たちに思ひ出させよう。

お前たちの氣難しい心は

私を傷けて恐れを抱かせた

されば私は成るべく

お前たちを眺めてゐる

一人の女の影から離れよう。

若しもお前たちが

死ぬのでなかつたら

逝いたあの人を
忘れてはならないよ
私の心は斯く叫んで
ひこり嘆息をした。

優しい思ひ

優しい思ひは
君の身の上を語りながら
私の許へ来て共に住み
懐しい愛を叫き合つたらば
私の心はその思ひに

引きこまれてしまった。

魂は心に向つて言ふ

『私たちの胸を慰めようこて

來たものは誰なのか？

然も彼の力がごんなに強ければ

空しい思ひをさせるのか？』

そこで心は答へて言ふ

『おゝ悲しい魂よ

これは新しい愛の靈であり

彼は私の胸に彼の憧憬を呼び起す。

然も彼の生命と

あらゆる力は

私たちの苦しみに

責めに苛まれる

この憐れみを知る

女の眼から動いて来る。

胸の思ひから

胸の思ひから

生れ出る盡きぬ溜息に

強ひられるまゝに

私の眼は眩み

私に同情する人を

見る力さへ失せ果てる。

煩悶にくれるのと

涙を流すのミたゞ二つの

願ひばかりがあつて

激しく泣き入れば

愛は私の眼に

苦しみの冠をかむらせる。

この悩みと私の溜息とは

胸の中で苦しみ

愛は彼を心痛させるのだ。

そは惱しい私の思ひのうちに

君の愛しい御名は書かれ

彼女の死ぬのを

話す言葉はつきもせず。

順禮たちよ

順禮たちよ

悩みに近づくは

愛しい人を慕つてか

御身等は心して

多くの人の中から

こゝに來られたのであらう？

悲しい街の中を

通つて行くときに

御身等が涙を流すここのないのは

恰度こゝにある深い悲しみを

少しも知るここのない人のやうだ。

されど若しも御身等が
歩みをこめて私の胸の
溜息から出る言葉を聞いたなら
御身等は街を出て行きながら
泣くであらう。

こゝに愛しいベアトリチエが
死んでから彼の女の身の上を

物語る人の言葉こそは
何時も人をして
泣かせる力のあるものを。

嘆 き

嘆きは私の胸から出て
隈なく照らす日輪の
彼方にまでも上りゆく
愛がこの嘆きの中に
そつと引き入れた

新しい智慧に惹かれつゝ。

その願望の域に達したら
譽高い一人の姫君を仰がれる
その光は美しく輝いて
順禮をする魂を
ちつとそこに立たしめる。

何を見たのかと訊かれても

私は知りもせず

ごんなに賢い物語も

傷いた胸には

容易に解わからない

私の知つてるところも

その語られることも。

たゞあの愛しい人の

身の上のことは幾度か

ベアトリチエを思ふため

私はこの思ひをも

知るここが出来たのだ

さかしき御身等よ。

地獄の關の刻銘

こゝを離れて悲しい街へ
こゝを離れて愁ひの淵へ
こゝを離れて浮ぶ瀬のない
人々の群へと這入りゆく
いさ篤い情はあるけれど

寂しい心もて何時も
限り知れぬ力を頼り
厳しい法律おきてに縛られて
この浮世に處するやうに
この關所に神は置かれたのであらう。

歌
よ

歌よ
賢い使の
装ひをして
躊躇せず
お前の方へやつて來た

美しいあの人に
自分の生命の
如何に果敢ない
ものであるかを告げよ。

私の眼はあの人
天使のやうな姿を
見たいその爲めに

心に望む花環を飾ると
告げてくれ
今は彼に逢ふ
ことも出来ないその爲めに
死はこの様な恐怖もて
私をそよのかし
私の眼に殉すべき者の
花環を贈つてゐる。

私は何處に

彼等が歡喜を

持てるかをも知らない

どうかよして呉れ

何時かは死んだ自分を

見出すであらうから。

されば歌よ

若しあの人の恵みや

慰めがなかつたら

おこなく願ひせよ。

私は美しい

私は美しい

人に知られぬ處女です、

私は自分の生れた場所と

美しく清らかなことを

お前たちに告げに來たのです。

私は天國から來たのです、

何時かは私の光りもて

人々に悦びを投げるでせう、

然も私を見ながら

愛を感じぬ人たちは

愛を永久に知らぬ人だらう。

私の求めてゐることに
對して違へるものがなかつたら
自然の心は私を神に任せ
然も御身等に私は
伴はれることとなつたのです。

星は何れもすべて
私の眼に光と徳の力で

注ぎ入れてくる
されば私の美しさは
この世で最も新らしいのです。
そはあの高い處から
私は來たのですもの
そは愛がすべての人に
歡喜を與へるその爲めに。

どんなこゝも知り盡した
人の智恵でなければ
識ることの出来ない
美しさであらう。

これ等の言葉は
私等の前に現はれた

一人の小さい天使の
顔に認められます

されば彼を何時までも
私は見ようと思つて
生命までも失はうと
云ふやうな場合にあるのです。

私は彼の眼の中に
隠れたものゝ中から
かくも痛傷を感じ
私は悲しみつゝ行き
何時も不安を感じてゐます。

心に餘る思ひ

おゝ心に餘る思ひの
幾多の悲しみの爲めに
眼は見えなくなり
自分で逢ひたい人を
見る力さへなくなつた。

しかも兩眼は

恰度泣いて悲しみを

知らせる一つの思ひのやうに

またすゝり泣く時は

愛がその眼に病冠をもて蔽ふ。

私の斯うした悲しみと

思ひとは心の中に潜んで

愛も何時かは

悲しみて氣を失ふ。

切なる悲しみは

身をめぐりて

あなたの愛しい名を刻み

何時までもその死を悼む。

愛しき人よ

愛しき人よ

未知の人の嘲るがやうに

君もまた私を嘲り給ふか

また君は氣づかれぬだらうか

不思議にも姿の

變り果てたさまを
そは君の美しさを
見た私の浮かれ心地。

若しも私の心中を
君が知つたなら
かくも辛く痛ましく
私の心の悩ますを

何うして哀れに

思はずに濟まされやう。

愛は君いますところに

何時も心やすけく悠々と

廣く限り知れぬ力をば

振り廻してゐるのを見よ。

そは戦く私の氣力は

追放されて家もなく

時には悩み

時には失望して

たゞ今は愛ばかりが

残つてゐて私を踏み止め

心もとなく獨り住む。

心のまゝに今は
君を見るのも羨ましい
そは私の變り果てた
顔を見せるその爲めに
口を噤んで茫然と
ひとり立ちて耳を傾けば
官能はたゞ聲立てゝ逃けてゆく、

——をばり——

大正十二年七月二十日印刷
大正十二年七月廿五日發行

ダンテの詩集
定價金八拾錢

譯者 石 躍 信 夫

發行者 大阪市西區初南通二丁目二
藤 谷 芳 三 郎

印刷者 大阪市西區阿波座中通二丁目四番地
井 下 精 一 郎

發行所

大阪市西區信濃橋交叉點西入ル

崇 文 館 書 店

電話土佐堀三六一九番
振替口座大阪二七八五番

ハイネの詩集	尾上柴舟譯
ハイネの詩集	松山敏譯
ゲエテの詩集	石躍信夫譯
ホイツトマンの詩集	松山敏譯
バイロンの詩集	石躍信夫譯
ヴェルレエヌの詩集	松山敏譯
ダンテの詩集	石躍信夫譯
ロングフエロウの詩集	松山敏譯

ポケット形各上質印刷紙印刷
 優美なる絹表紙装幀箱入

(各定價金八拾錢
 郵稅各金四錢)

發行所 崇文館書店

振替宛二七八五番

